

第 17 回目 キリストによる平和の実現

【新改訳改訂第 3 版】エペソ人への手紙 2 章 14～17 節

- 14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、
- 15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、
- 16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。
- 17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。

- 14 節の一つに「する」、隔ての壁を「打ち壊す」はアオリストの分詞形。
- 15 節の敵意を「廃棄された」もアオリストの分詞。
- 16 節の敵意は「葬り去られました」もアオリストの分詞。
- 17 節の「宣べ伝えました」もアオリストです。

以上のように、キリストの十字架によってすでに成された事実、私たちはいつも目を留めながら、そこに立ち続けなければなりません。ギリシア語のアオリストは、ヘブル語では「預言的完了形」と考えることができます。

はじめに

● 前回は、キリスト教の歴史において、約二千年間、見失われ、隠され続けてきた奥義としての「新しいひとりの人」ということばについて学びました。この「新しいひとりの人」という奥義は、使徒のパウロには開かれていましたが、その後、この真理は見失われたのです。この「新しいひとりの人」という真理が再びクローズアップされたのは、イスラエルの国が建国された 1948 年以降のことです。つまり、教会がキリストにあって、キリストの花嫁として完成されるためには、イスラエルの民が約束の地において、国家的、霊的再生を遂げることなしにはあり得ないということなのです。

「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」(3:6)

● 神の民として選ばれたイスラエル(ユダヤ人)に異邦人のクリスチャンが接ぎ木されて、「新しいひとりの人」を形成するというヴィジョン、この「新しいひとりの人」とは、別のことばで表現するならば、「キリストをかしらとするキリストのからだ」、つまり、教会を意味します。これが神の作品であり、神の夢なのです。

● 神に選ばれたイスラエル(ユダヤ人)と異邦人という区別こそ、この世界のあらゆる分裂の「根」なのです。私

たちが思う以上に深刻な分裂が存在し、悲惨な結果をもたらしてきたのです。したがって、ユダヤ人と異邦人が「新しいひとりの人」となることは、神わざなのです。しかし神はこのことを実現してくださったのです。だれを通して？ それは「平和の君」と呼ばれるイエス・キリストによってです。今回は、エペソ人への手紙の 2 章 14 節にある「キリストこそ私たちの平和」ということばをキーワードにして、私たち人間の中に存在するさまざまな隔ての壁が平和の君であるイエス・キリストによって打ち壊されて、はじめて真の平和が実現していくことを考えたいと思います。キリストのからだである教会は、まさにその平和が実現している場であり、平和の君がかしらとして支配しているところだからです。

●12 月をご承知のようにクリスマスの季節です。世界の教会では神の御子イエス・キリストの誕生を祝うクリスマスの行事がなされようとしています。私たちの教会ではクリスマスの特別な行事(イベント)はしませんが「平和の君」としてこの世に遣わされた神の御子について瞑想するクリスマスの季節(とき)としたいと思います。ですから、今回は「キリストによる平和の実現」といたしました。クリスマスになると歌われる讃美歌があります。「諸人こそぞりて 迎えまつれ」という歌。その歌の 5 節は「平和の君なる御子を迎え」です。まさに真のクリスマスとは、私たちの心にこの「平和の君」を迎えることなのです。

1. 平和の君なるキリスト

●ところが、この「平和の君」ということばは、聖書の中で何と 1 回しか出てきません。

イザヤ書 9 章 6 節

ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は「不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君」と呼ばれる。

●とても重要なことばです。英語では Prince of peace といいます。Prince (プリンス)とは、王子、皇太子を意味することばで、王の子としての立場にある存在です。あるいは、ある世界で将来第一人者になりうると囑望されている若い男子のことを言います。ちなみに、プリンセスとは王子の花嫁のことを言います。

●この「平和の君」が赤子としてこの世に遣わされたとき、天の御使いたちは次のように賛美しました。「天軍賛歌」と言われる賛美です(ルカの福音書 2 章)。

いと高き所に、栄光が、神にあるように。

地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。

●この歌をはじめて聞いた人々はだれだったのでしょうか。それは当時の社会の中で疎外されていた人々、つまり野原で野宿していた羊飼いたちでした。彼らは人口登録することもなく、ある意味で社会の中では疎外されていた階層でした。その者たちにこの天軍賛歌が聞かされたのです。ただこの「天軍賛歌」は後にキリスト教の賛美歌の中に盛り込まれるようになります。

אגרת שאול אל האפסים

讚美歌 98 番

「あめには栄え、み神にあれや
つちにはやすき ひとにあれや」と
御使いたちの たたうる歌を
聞きて諸人 共に喜び

讚美歌 119 番

「あめにはみさかえ 神にあれや
つちにはおだやか 人にあれ」と
昔の調べを 今にかえし
歌えや 友らよ 声も高く

●ちなみに、「日本語に翻訳される際には、「平和」が「やすき」とか、「おだやか」ということばで表現されました。これは聖書の伝える真の「平和」という意味を残念ながら正確には伝えていないように思います。以下の図のように、平和にはいろいろな考え方があります。

●日本の讚美歌では、(2) のギリシア的平和の意味で使われているように思います。聖書の言う「平和」とは、単に争いのない「平和」を意味するだけでなく、神と人とが、人と人とが和解することによってもたらされる共同体的な、しかも神の永遠の祝福、神の永遠のヴィジョンを表す概念なのです。聖書の意味する「平和」が意味するのは、右の図のとおりです。

●このことを正しく理解していた一人の人物として使徒パウロをあげることができます。この使徒パウロほど、「平和」(シャールーム)こそ、神の救いであることを強調した人物はおりません。彼の手紙にはこの「平和」の概念を表す思想で満ちています。今、私たちが学んでいるエペソ人への手紙においても然りです。特に、今回のテキストの箇所では「平和」ということばがくりかえし出てきます。

「平和」ということばが 4 回

その反意語である「敵意」が 3 回、「隔ての壁」が 1 回。

その同義語である「和解」が 1 回。

その類義語である「新しいひとりの人」が 1 回、「ひとつのからだ」が 1 回。

●「キリストにある平和」を要約すると、(1)~(4) のようになります(右図)。これだけを見ても、パウロがいかに「平和」(シャールーム)の問題について考えていたかが分かります。ですから私たちも、この「平和」についていつも考えながら生きなければならないことを教えられます。

「平和」についての考え方

- (1) ローマ的平和
圧倒的な軍事力によって実現される
抑止的平和(国家的)
- (2) ギリシア的平和
心の平静、争いのない状態としての
平穩的平和(個人的)
- (3) 聖書(ヘブル)的平和
神と人、人と人とのかかわりにおける
共同体的平和(社会的)

シャールームが意味するもの

- (1) 平和 (対国、対神、対人)
- (2) 平安 (個人的)
- (3) 繁栄 (商業的)
- (4) 健康 (肉体的)
- (5) 充足 (生命的)
- (6) 知恵 (学問的)
- (7) 救い (宗教的)
- (8) 勝利 (究極的)

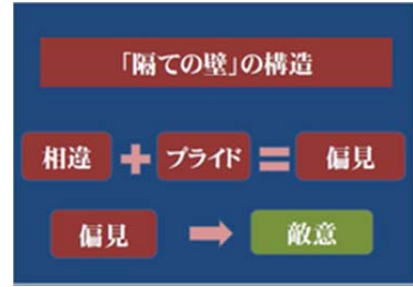
エペソ人への手紙2章14~17節

- (1)キリストこそ私たちの平和
- (2)キリストが平和を実現する
- (3)キリストは十字架によって、「敵意」を葬り、ひとつのからだにおいて神と和解させた
- (4)キリストは平和を告げ知らせた

2. 平和を妨げる分裂の根としての偏見と敵意

(1) 「隔ての壁」の構造

● 偏見は、自分のもっているものを誇張し、他の人のもっているものを軽んじさせます。事実、ユダヤ人は無割礼の異邦人を「犬」とみなしました。つまり、何も優れたものをもたない存在という意味です。このように偏見は、物事を正しく見ることをできなくしてしまうだけでなく、あらゆる分裂や敵意をもたらす「隔ての中垣」となってしまうのです。偏見はまさに無知をコンクリートで固めたようなもので、それを取り除くことは極めて難しいのです。



(2) 偏見に基づく「敵意」の感情

● 敵意とは何でしょう。敵意の反対のことばは何でしょう。それは「好意」です。相手が自分に好意をもっているか、なんらかの敵意をもっているか、それは意外と敏感に分かるものです。幼い子供でも自分に好意的である人かどうかを直観的に識別できると言われます。敵意は、恐怖心や警戒心、怒りや憎悪、恨みや恥、復讐心などといった感情と密接に結びついた根深い感情の一つです。

● それにしても、どのようなときに私たちは敵意を抱くのかを少し考えてみたいと思います。私たちは自分の存在が脅かされる時、自分が傷つけられ、あるいは自分の愛するもの、大切にしているものが傷つけられ奪われようとする時、あるいはそのような危険を感じたときに、相手に対して強い敵意を持ちます。つまり「敵意」は徹底的に敵を排除しようとする感情です。それは逆に言えば、自分を守ろうとする感情であると言えます。ですから、**敵意とは「極めて自己防衛的な感情」である**ということが出来ます。敵意とは自分に襲いかかってくる相手に防戦するための本能的な感情なのです。

● 敵意を持つとき、人は身を固くし、身構えます。攻撃に備え、すぐさま反撃に移れるように対処しています。人間の文明を築いていく最初の人間たちが、きわめて強烈な敵意、つまり自己防衛本能的感情をもっていたことをあかしする歌、これが創世記 4 章にある「レメクの歌」(自分が受けた傷のためには七十七倍の復讐をするという内容)です。異常なほどの復讐心ですが、その裏には異常なほどの自己防衛反応を表しているのです。

● 敵意によって、憎しみが憎しみを生むという連鎖が人間の歴史の中に築かれてきました。力に対しては力をもってという、いわば、終わりのない復讐を繰り返す現実の人間の愚かさ、悲惨といったものをも感じます。テキストに戻りますが、実は、神の民であるユダヤ人と異邦人の間にもこの「敵意」が存在していました。ユダヤ人はかつて神のみこころに従わなかった結果、バビロン捕囚という亡国の憂き目をみます。しかしそこから解放されて自分たちの国に戻ってからも、異国の支配は四百年間続きました。そのプロセスの中で、次第に、自分たちは他の人々とは異なる聖なる民だという自己意識を強めることによって、自分たちの存在のアイデンティティを持つようになりました。

● 具体的には、自分たちの神殿の中に、「異邦人の庭」－それは神殿の一番外側にある－というものを作って、それ以上、異邦人が中に入らないよう禁じました。もし「ユダヤ人の庭」に入るならば、殺すという仕切りでした。これもユダヤ人が長い間、異邦人の支配によって搾取されてきた歴史の中で培われた自己防衛本能から作り

だされたものと言えます。「異邦人の庭」はユダヤ人と異邦人との間に存在する「敵意」の象徴のひとつの例です。聖書のテキストでは「敵意とは、さまざまな規定からなっている戒めの律法」となっています。もともと神の戒めである律法は、礼拝の具体的な仕方や神の民が祝福を受けるための方法を記したものです。いわば救いの道を示したもののなのです。その律法のどこに敵意が入り込んだのでしょうか。それはこうです。ユダヤ人は異邦人と自分たちは違う存在であり、自分たちは特別な存在だということを意識するために、異邦人は「犬」（軽蔑用語）であり、全く人間とはほど遠い存在だと考えるようになっていったのです。

●一方、「犬」呼ばわりされた異邦人は異邦人で、ユダヤ人をよりいっそう憎むようになってしまったのです。ユダヤ民族の迫害の歴史は、ある意味で、ユダヤ人が神の律法を「隔ての中垣」としたことによって、自分たちは優秀な民族だと思いこみ、そこに敵意を呼び込んでしまった結果によるものなのです。もともと神の戒めは賜物として与えられたものです。神の救いをあかしするものとして与えられたはずの戒めが、ユダヤ人の自己防衛的感情によって、異邦人たちと彼らと「隔ての壁」とされ、そこに敵意が作られてしまったのです。

●こうした敵意を廃棄された方がイエス・キリストです。どのように廃棄されたのでしょうか。それは、ユダヤ人が築いた戒めの律法を廃棄することによってでした。つまり、キリストを信じることで十分としたことで、隔ての中垣とした戒めによる自己防衛の意味がなくなってしまったということです。ユダヤ人は異邦人と異なるとする隔ての壁が崩れてしまったことによって、敵意の入り込む隙がなくなってしまいました。ここに「キリストこそ私たちの平和です」という宣言が確立します。自己防衛本能が神によって保障されない限り、敵意は存在し続けるのです。

●20世紀は人間の歴史の中でも最も知識や科学や技術が進歩した世紀です。と同時に、人間同士が殺し合った殺戮の世紀でもあります。国と国がさまざまな利権をめぐる戦いがなされ、多くの人々がその犠牲となりました。自分を守ろうとする防衛本能があるかぎり、敵意を生み、平和を実現することは決してできません。私たちの心にも、自分を自分で守ろうとするとき敵意が生まれます。そこでは真の平和を楽しむことはできません。家族のなかに存在する敵意、夫婦や兄弟同士の中に存在する敵意、学校や職場の中に存在する敵意、国と国との間に存在する敵意、そして教会と教会の間においても敵意というものが存在するのです。

●あそこの教会に行ってはだめだよ。「信仰がおかしくなってしまうから・・・」「聖書的じゃないから・・・」と言って、自分たちの神学によって敵意を作りだしています。しかしその背後には自分たちを守ろうとする姿勢が隠れています。神のことばである聖書によって「隔ての壁」を作り、敵意を呼びこんでしまっています。なんと私たちは罪深いことでしょうか。ここから分派、教派、異端という流れが生まれてきます。社会派と福音派、福音派とペンテコステ派というように・・・大切なことはいずれもキリストなしには存在し得ないというところに立つべきです。自分たちの拠って立つところの神学ではなく、キリストに根拠を置く時に、はじめて平和の道が開かれていくと信じます。

(3) キリストこそ平和を創造される方である

אגרת שאול אל האפסים

●「二つのものを一つにして・・・新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現する」と聖書にはあります。キリストは隔てとなっていた中垣を十字架によって打ち壊されました。つまり、ユダヤ人も異邦人も等しく神の前に罪人であることが示されたのです。それまでのユダヤ人が誇っていた戒めを廃棄し、もはやさまざまな規定からなっていた戒めの律法(=ユダヤ人が解釈した律法の規定)はいらなくなったのです。だれもがキリストを通して。ユダヤ人も異邦人の区別もなく、自由人も奴隷の区別もなく、富める者も貧しい者の区別もなく、学歴の区別もなく、生まれ育ちの区別も、家系の区別もなく、また男も女も、大人も子供も、みな区別なく、ともにキリストを通して神の御前に近づくことができ、神の家族となることができるようになったのです。それを創造できる方はキリストしかいません。その意味で、「キリスト(ご自身)が私たちの平和そのもの」なのです。そのことをあなたは信じますか。キリストこそ真の平和を実現する方であると確信して、このキリストにあって生かされることを選び取ることこそ、本当のクリスマスの迎え方だと信じます。

